

# 自問教育の会



EOOSA Education of Self-Asking

発行日：2013（平成25）年8月11日 No.5

発行者：自問教育の会（会長：小島信由）

編集：自問教育の会事務局（丸山 小林 斉藤 白澤 吉川 片岡）

事務局：長野県松本市会田 8923 松本市立会田中学校内 丸山博

連絡先：電話：0263-64-2020 FAX：0263-64-2974

URL：http://jimon.3zoku.com/

問い合わせ先：http://jimon.3zoku.com/php/sformmail.html

## 《会長挨拶》

「自問清掃をやって、先生の普通の指導法が変わってきたことない？」

自問清掃を始めて2年くらいが過ぎる頃でしょうか。私が在職当時、若い先生に投げかけた突拍子もない質問に、面食らいながら、「いえ、特別に変わったことはないです。」

と、返してきたA先生。また、別の学校で一人自問清掃を始めたB先生。久しぶりに会った時、

「自問清掃はいいですね。先生に教えてもらって感謝しています。今、一人でがんばって始めています。」

と。そもそも、「自問清掃」の活動の時間は、先生方にとっては凄く忍耐の時間です。なぜなら、先生や友だちに「束縛されずに活動する自分の心磨きの時間」なのだから、世話好き（言葉を換えると注意しがり）な先生方にとっては何も言わないで見ても見ぬふりをする時間が何とも耐え難くつらい。さらに、自問の仕方が分かっていない子を意識したとき、腹が立ちすぐにでも注意し（言葉を換えると怒鳴り）たい気持ちをなかなか抑えきれない自分に気づく。結局、自ら勝手に高まってしまうストレスを抑えるために、ひたすら浸り込んで雑念を振り払う清掃をするしかないのである。でも、それを乗り越えた時（主観的に自分がそう思えた頃）、変わることがなかった従来の指導法を反省し高まっている自分の姿にも意識せざるを得なくなる。具体的には、私は次のことが意識できた。

- ・あらゆる指導の場面で、その時・その場で指導することの危うさに気づく。事実をしっかりと見届けた後、その上で指導法を考え相手にも配慮した物言いで指導する。（感情的になりづらく、一方的な価値判断になりにくい）
- ・子どもに活動の自主性や目的意識をより意識的に高めさせられた。授業で「主体的に追究する・・・」を研究しているのと同様、活動においても「自主性」「目的意識を」を持たせ高めた時の子どもの活動は素晴らしい。
- ・教師と子どもの心の信頼関係が深まった。

そこで、冒頭の先生方との会話で、B先生は自問清掃独特の手法（子どもを信じて待つ）を実践しながら、先生ご自身も教師として高められた姿を感じたり子どもたちの成長を感じたりしたからこそ、この方法はやめられないと言われたのだと推察しています。

「自問教育の会」は、第22回を迎えました。今年は長野県に戻り、松本市立会田中学校で、先生方の心の修行の場である「自問清掃」の時間について大いに語り合おうではありませんか。

会長 小島 信由

## 第22回 全国自問教育の会

長野県松本市立会田中学校 11/29(金)30(土)

### テーマ

「自分の行為を振り返りながら自立していこうとする  
生徒を育てるにはどうしたらよいか。」  
～自問ノートの教材化を通して～



## 《大会日程》

| 11月29日(金)                        | 11月30日(土)                       |
|----------------------------------|---------------------------------|
| ○受付 (13:15 ~) ○清掃参観 (13:35 ~)    | ○受付 (9:00 ~) ○講演会 (9:30 ~)      |
| ○公開授業 (14:05 ~) ○開会行事 (15:10 ~)  | ○実践交流会Ⅱ (10:40 ~) ○昼食 (12:00 ~) |
| ○授業研究会 (15:30 ~) ○実践交流会Ⅰ (16:40) | ○実践交流会Ⅲ (13:00 ~)               |
| ○情報交換会 (18:30 ~)                 | ○閉会 (15:00)                     |

## 会場校長のご挨拶

目問教育に取り組まれている全国の諸先生方にご挨拶を申し上げます。この度、本校で全国大会が開催されることは大変栄誉なことと思っております。また、本大会の開催は、本校の生徒と教職員にとって、大いに有益なことでもあり、深く感謝申し上げます。

「教学相長也」座右の銘にしております。中国の古典「礼記」にあります。「教えることは学ぶことであり、学ぶことはすなわち教えることである」との意。私が師と仰ぐ方から頂きました。

会田中学校に2年前着任した時、「自問清掃」を通し教師としての資質を高め、生徒の成長を期している職員と出会いました。子どもの内面に、精神性に重きをなした教育実践に果敢に挑戦している姿に感銘を受けました。その実践は、子どもの成長を願った「人間教育」を希求するものであるとのこと。私が求めているものでもありました。ただ、従前と異なる独特の指導法が求められ、教師自身の理解（自覚の成立）がし難いとの現実もあることも、承知していました。では、「自問清掃」をすることの意義を感じつつも、不安も抱いてのスタートをきる事にしたのはどうしてか。それは、「子どもも教師も変わった」という他校での実践（証拠）を突きつけられたからです。

「自問清掃」を会田中学校の教育活動に取り入れ、教師自らが実践し学ぶことは、「教学相長也」を具現することになることと思っています。本校の実践が、有意義なものとなっているか、また有価値であるか、公開授業等へのご批判、ご助言をよろしくお願い致します。

会田中学校がある四賀は、すばらしい自然に恵まれ「嶺間の地」とも称されます。また万葉の歌にも詠まれた保福寺峠もあり、歴史と文化の地でもあります。当日は、そのような地での2日間の大会となります。多くの先生方のご来校を願っております。

長野県松本市立会田中学校

校長 丸山 勝久

《参加費》3000円 《締め切り》10月18日(金)

### 《申込先》

目問教育をすすめる会事務局

〒399-7402 長野県松本市会田 8923 番地

松本市立会田中学校内 丸山 博

電話：0263-64-2020 FAX：0263-64-2974

E-MAIL [marusan814@ae.auone-net.jp](mailto:marusan814@ae.auone-net.jp)

または当会公式ホームページ <http://jimon.3zoku.com/>の「お問い合わせ」より

### 《申し込み内容》

- ①参加者氏名②住所③勤務先④メールアドレス⑤電話番号 ⑥参加期日(1日目のみ・2日目のみ・両日参加)  
⑦情報交換会(参加・不参加)⑧宿泊(必要・不要)⑩実践発表希望(あり・なし)ありの方は発表テーマ「 」



## コラム 自問への窓

自問教育の会 初代会長 原 秀幸 先生

この頃の世相から、改めて竹内隆夫先生ご考案の自問教育の重要性、必要性を痛感します。

半世紀程前、数学者の岡潔先生は、ある著書で以下のように述べています。

人間の脳の働きについて、大きく分類した側頭葉は記憶と判断をつかさどり、前頭葉は側頭葉に命令することと、感情・意欲・創造をつかさどる。前頭葉の命令なしに側頭葉だけである判断を『衝動的判断』という。

この『衝動的判断』は1つの行為で、これは修羅の行為です。人のすべきことではないのです。前頭葉は側頭葉に命令することができるのだから、側頭葉だけの判断を抑止することができる。抑止するという働きが前頭葉固有の働きで、この力を強くすることが大事です。

学校教育の役割は、知育です。即ち、側頭葉の働きを高める活動で、明治以来大きな成果をあげています。従って、側頭葉の働きである判断する働きも活発にさせて来ているのだと思います。その事は近ごろ顕著に現れ、殺人・詐欺・暴力（体罰も）・いじめ・窃盗等大人から青少年に至るまで、多発しています。これらは、前頭葉で抑止の命令を出せば、起きない行為であり、前頭葉の働きがきわめて弱い結果だと思います。

前頭葉は、脳神経細胞が、自発的行為によって連結していき、多く連結している程働きが良いと言われていています。かつては、前頭葉の働きの意志力（意欲）のやる気やがまん力は日常の家庭生活等の中で、創造力（創造）は遊びの工夫等の中で、情操（感情）も家族や社会生活の中で自然に育っていたのだと思います。しかし、戦後の核家族化、特に、物質や金銭重視の豊かな生活への変化によって前頭葉が発達する環境が失われてしまいました。

竹内隆夫先生の自問プランは、前頭葉を積極的に発達させるプランです。家庭や社会生活が、前頭葉が発達する環境でなくなった今日、人間形成を担う学校教育は、知育と共に、前頭葉の育成も大切な役割となったと思います。

前頭葉が発達するのは、やらされる行為ではなく、自発的行為によるのであるから、自発性が生まれるまで待たなくてはならないのです。学校教育の中で、積極的に前頭葉を発達させるには、日課の中で、教科はCSにより到達目標があり待つ余裕はありません。しかし、清掃活動の時間を従来の『清潔にする活動』とのとらえから、『前頭葉育成の活動』と転換すれば、自発的行為による活動となるまで待つことができるのです。

竹内隆夫先生は、そこに着眼されて、清掃の時間を『前頭葉育成活動の場』としたのだと思います。従来の清掃活動とは異なるので『座り』が入るのです。

今こそ、自問教育は学校教育活動で不可欠な教育活動であることを、痛切に感じます。



## 新連載

日本教育新聞社より平成7年5月に発行された自問清掃の創始者である竹内隆夫先生の論文を連載します。自問教育に対する考え方が簡潔にまとめられています。

### 連載第1回

## 実践の中で

# 自らを高める自問教育



竹内隆夫先生

## の手引き

## 新たな発想による清掃活動

—人としての成長を願って—

竹内 隆夫 著

### <目次>

#### すいせんの言葉

1. 実践の場こそ
  2. 紆余曲折を経て
  3. 自由とは迷惑をかけないこと“人の痛みがわかる”
  4. 心を汲む気働き“人の心がくめる”
  5. 創造と発見“人のねうちがわかる”
  6. 感謝の心で増分との違いか許せる”
  7. 正直ということ“胸に自分なりの尺度ができる”
  8. 教師のあり方
  9. 理念の背景
- あとがき

### すいせんの言葉

## 絶大な成果を得た『自問教育』

三重大大学教授 齋藤 昭

現代は二重の意味で転換期である。ひとつ21世紀が目撃となったこと、もうひとつは第二次世界大戦から50年を経たことである。前者は人類の生存が根本的に問われる世紀末的不安の現象であり、後者はわが国が半世紀の間、国是としてきた民主主義の存続の可否に関わる場所である。我々は世界にある日本人として、今後とも生存して行こうとする限り、この二つの危機的状況を超克しなければならない。教育もその責務の一端を担う。このような時、竹内隆夫先生によって創始され、絶大な成果を得た「自問教育」の手引きとして『新たな発想による清掃活動』が日本教育新聞社のご厚志により、装を新たに刊行されることは、時宜を

得たものとして高く評価し、教育界はもとより江湖にも広く推薦するものである。

わが国の教育は、いじめ、暴力、不登校等の現実をあげるまでもなく、整備不可能なほどに病みかつ荒廃している。かつて林竹二はこれを“民族の死に至る病い”と捉え、文部省の責任を問い、真の人間教育の無い状況は“教育亡国”に至ると警告した。竹内先生もまたご自身の教育経験を踏まえて、指導要領改訂毎の子供無視の注入量のみ増加、選別機関と化した学園の現実を訴えられ、これによって生ずる原因を剔抉し、《つめこまれる苦しさから学ぶ楽しさへ》の方途を「自問教育」において見出されたのである。前者が大

学紛争の解決を契機とし、後者が非行解消の教育的成果によってそれぞれ注目されるに至ったのであるが、両者は共に戦後わが国の教育が抱えていた難問ないし病巣と対決し、人間教育の原点を開示したことにおいて不朽の意義があると考え。というのは林が関わった学生たちを戦後教育史の中でみるならば、正に道徳教育不在の中で、自己主張のみを美德とする教育の中で育った世代であり、竹内先生が直面した教育現実とはほぼ彼らを親とする生徒集団であったからである。つまり先生が直面した現実をこれを構造的に把握し全体的に解決しなければ、一步も先に進めない事態にあったのである。そこに要請されるものは強靱な思索と不拔な実践の統合であるが、これが竹内先生においては、学校教育の中でとかく軽視されがちな労働である〈清掃〉を通しての「自問教育」であった。それが如何に革命的成果をもたらしたかは、本書開巻に記されている通りであるが、単に過去の教育実践の記録ではなく、今日から明月への教育に確実に生きて行くものとしての教育の指針である。授業の効果だけを狙うハウツウものを越えた普遍的な即ち世界に通ずる人間教育の哲理があるのである。先生はこれを、「信じて待つ」という人間信頼を基調として生徒と立ち向かい、①自由とは迷惑をかけないこと、②心を汲む気働き、③創造の発見、④感謝の心で、⑤正直ということ、という5項目に要約し、他者の痛み、その存在の価値と差異性の理解、そしてこの上に立っての人間理解の尺度を設定する人間像を示されたのである。しかも単に徳目としてこれを教示するのではなく、不言実行の〈清掃〉を通して生徒一人ひとりに自覚させるところに、この教育活動のすぐれた特色があると言えるであろう。

惟うに「自問」とは学校という共同の場で行われるのであるから対他の中で自らの在り方を問うことであり、「活動」とは自他共同の活動である。かくて「自問教育」は個人と共同社会の調和ある発展を目的とするのであるから、真実の民主教育の実現となる。私はこの教育こそわが国の民主主義を健全に発展させ、21世紀への人類生存の可能性を拓くものと信ずる。

## 1 実践の場こそ

私が最後の勤務校となりましたK中学校は残念ながら着任の前年、県下最大の集団万引き事件をひき起こしました。着任の前年は県教委で非行統計を扱っていましたが、当校からの報告も受けていました。着任してみて、崩れるべくして崩れた理由も知ることができました。

着任直後、県下で大きな非行事件のあった学校長が家裁から召集され、懇談会が持たれました。私も出席しました。まず学校別に刑法犯該当の生徒数がプリントで配られました。この数は首謀者の数ですから万引き事件の場合多くても3、4名でした。しかし、私の学校は2桁もありましたので、いぶかった校長さんから「ミスプリントではないですか」と質問されたほどでした。

その後生徒の精神性を高めようと苦慮しながら、先生方の協力を得て2年間、自問活動を提唱し、取り組んでいただき一応の評価を得て退任しました。まわりからは泥棒学校とか不良学校などと呼ばれていましたが、2年目には真面目学校と言われるまでに変わりました。1年間で生徒を立ち直らせたということで、生徒指導の優良校とされ、1年目は県の内外から100名近い先生方の視察を受けたのです。

参観に見えた先生方の中には、明るい表情で黙々と働く生徒の姿を見て、「まるで修行僧だ。同じ中学生がなぜこうも変わるのでしょうか」などと驚かれました。この間、先生方の苦勞もたいへんでしたし、生徒達も汚名を挽回しようと、一丸となって立ちあがってくれました。

2年たち、退任の直前には新聞やテレビで報道され、なぜ手の平をかえしたように変えられたのかと話題にされました。退任後、県の社会福祉協議会から専門講師を任命され、県下に体験の紹介をしてほしいと依頼され、講演活動で忙しくなりました。

さて、中学校での1年目は夢中で生徒に人間らしい生き方について説得しようとしたのですが、生徒にじかに話せる時間は月曜日の全校朝会の中の、わずか10数分なのです。そのための原稿作りには私なりに苦慮し

ました。後に新聞社から求められて連載させていただき、また出版社からの依頼で「中学生への提言」として出版しました。

週に1回の講話では意のある所を浸透させにくいので、出張された先生の補欠授業はなるべく引き受け、生徒に接する機会を多くしようとしました。そのほか先生方に指導法の参考になればと思い、私流儀のとび入り公開授業もやりました。指定研究の体育と理科以外はすべての教科に亘り、都合のつく先生に見てもらいました。思いのほか生徒からの受けもよく、先生方からも評価をいただきました。

また、休み時間もなるべく校庭で生徒と遊ぼうと思い、体育用のほかに、専用のサッカーボールとはちまきを備え、教室から早く校庭へ出れるように校舎毎に下駄箱を備え、昇降口をふやしました。

私の留守に新聞社から取材に見え、教頭に「学校が変わった最大の原因は？」と尋ねられ、朝会のたびに校長が提案した自問清掃でしょう、と答えたそうです。本来なら生徒に伝える前に先生方に理解を得るべきものですが、あまりに従来の清掃とは発想が違うので、いきなり全員のいる朝会で提案してしまいました。

清掃に立ち向かう心遣いも従来とは10カ所も発想が異なっています。それを段階を追って次々に提示したのですが、そのたびに誰からも唐突に響いたようでした。この案が軌道にのるにつれて、生徒からは共感がよせられ、やがて生活態度に成果が見えてきました。先生方も次第に納得してくれました。こうしてそれまでの汚名が次第に消えていきました。

次期生徒会長立候補の第1公約にも、「自問活動の推進」をかかげて当選するなど、生徒側からこの伝統が受け継がれるようになり、以来10年間非行のない学校として評価されました。その後、このプランをはき違える先生方が転入するようになり、私も招かれることもなく、足並みは崩れてしまいました。

これにかわって、他の多くの学校が取り組まれるようになりました。全国非行統計で本県は中学校だけ非行が少ないのは、自問活動の影響であろう、などと県教委の担当から指摘されました。

## 「巧言令色すくなし仁」

残念ながら今は年毎に非行は増加し、その7割はいわゆる万引きであります。どの学校も対策に苦慮しているようですが、ほとんどは一時のがれの策です。今はすべての子供を対象として全校のモラルを高める画期的な方策が求められていると思うのです。

教育課程にはそのために「道徳」の時間も「生徒指導」の時間も置かれています。しかしいずれも深刻な現状を救うにはほど遠いものです。現行の道徳はなぜ効果をあげ得ないか。理由は実践活動と遊離しており、しかも取り扱い方が生活技術程度に終わっているからで、心にとどく指導にはならないからです。例えば価値かつとうと称し、親の手伝いと友達との約束の板ばさみになった時どうするかを話し合わせても、身の処し方がつかめるだけで徳性には及びません。文学教材の「よたかの星」などを読んでも、差別が許されないことを観念として理解できるだけで自らの実践に迫る力はありません。

さらに問題なのは資料のほとんどが間接的で、自己を吟味にかけける切実感がありません。このような他人ごとの話し合いの中から生きる姿勢を築く力は育たないでしょう。誰も盗みや暴力が許せるものでないことは知り尽くしています。問題は衝動や出来心の感情を圧えるブレーキが欠けているのです。行為を律する意志力が育っていないのです。それは体験の中でのみ獲得できるものです。どんなに口で討議させても、理屈達者が偽善者になるだけです。

孔子も「巧言令色すくなし仁」と言い、むしろ不言実行の徳を説きました。古来すぐれた宗教家は例外なくすぐれた実践者でした。説教が如何にうまくても、行為が伴わなければ説教師ではあっても宗教家とは言いません。そんな判断から、このプランは当初から実践の場を選びました。

もちろん教科の学習にも行為の場はあります。体育・技術・音楽・美術・理科実験・調査活動はすべて行為の場ですから、そこでの心遣いが吟味されるならば、効果をあげることは可能でしょう。古来芸道・茶道・禅の修行などはすべて「行」によって人間性を高めましたから。

しかし教科は道徳性を高めようとする視点から見ると限界があります。教科にはそれぞれ教科独自の到達目標が定められているからです。教科のねらいを達成する速度と、徳性の高まるスピードとは一致するものではありません。後者は個々の自覚の高まりを待たなければなりません。清掃では進捗と成果さえ問わなければ待ち続けることは可能です。そのために清掃の中でも発想の転換を必要としたのでした。

すでにギリシャのアリストテレスもこう言いました。「正しく行為することによって正しい人が生まれ、節度ある態度をとることによって節度ある人になるのはたしかなことである。しかしながら、よき知見を持ちさえすればよい人になると考えている人が多いのは驚くべきことである」と。

今私どもが行っている道徳の授業は、この驚くべきことをやっていると思うのです。行為ができないのに、行為と理念を切り離し、概念をもてあそび、頭でっかちな子供にしていると思うのです。私の美術の恩師石井

鶴三先生も、常々「人間は机上学問では高まりません。歩きまわらなければ立体はつかめません」と教えられました。教室の授業は、それが自問から発しても、「わかる子供」になるまでが限界であって、「できる子供」までの保証は得られません。道徳的行為のできる生徒にするには、実践の場をくぐらせることが絶対条件なのです。

私は授業を否定はしませんが、授業の中でわかったことを、その日の清掃活動へおろし、行為の吟味にかけることにしたのです。従って、活動こそ本番の授業となることから、自問活動と名づけました。

こうして、自分にできるかできないかのハードルを5つ用意しました。生徒はひとつのハードルを越すごとに実感として自らの成長が自覚できたのです。本来道徳は実践の倫理ですから、自らの実践力との対決が求められるということは、むしろ当然なことでしょう。

〈次号に続く〉

## 全国の実践者たちの声

全国に広がりを見せている自問清掃。実践者の先生方に声を寄せていただきました。ご意見ご感想がありましたら、事務局までお気軽にメールなどでご連絡ください。

### 大阪府 東大阪市立縄手南小学校

岡本 美穂

#### 私と自問清掃

私が自問清掃に取り組むのは3年目になります。2年前に取り組み始め、校長先生が「学校に広めよう」と言って少しずつですが学校に広がり、去年度は平田先生にもお越し頂き研修会を行いました。また、「市の教育フォーラム」でも学校の取り組みの一つとして「自問清掃」を伝えました。3年目の今年、学校に平田先生が来て助言して下さりました。今年度私は転勤になったのですが、学年で9月から正式に自問清掃に取り組むことになりました。このように書いていると、スムーズに事が進んでいるようですが、私は全てのきっかけは去年の野々市中

学での研究会だと思っています。そこで私の人生が変わりました。自問清掃をやる自分から、自問清掃から学ぶ自分になりました。今、大阪で「自問清掃教育の会」が発足されました。互いに話し合いながら自分を振り返る場に来たらと思っています。「子どもをどう動かすか？」そんなつもりはなくとも、見返りを求めた教育になっていることがあり反省をしています。私もまだ学びの途中です。一緒に学ばせて頂けるお仲間が一人でも増え、交流できたらより良いなと思っています。

### 大阪府摂津市立味生小学校

藤原 光雄

児童美化委員会ですすめる自問清掃のとりくみ

3年前より自問清掃に全校でとりくんでいる。取組は児童美化委員の取組として進めている。すすめ方として月に1つの玉を決めて磨いていくことにしている。「今月はがまん玉を磨きましょう」「今月はみつけ玉をつかいましょう」といった目標を児童集会で発表し取り組んでいる。

そして自問カードを毎週月曜日に児童に配り、金曜日に集め、取組の状況を把握している。各クラス3名ほどの自問清掃の気付きを「美化通信」に掲載し、意識付けを継続する材料として提供している。自問カードと読み聞かせを各担任が行うことによって、自問清掃に近づいていくことを期待している。

## 大阪府東大阪市立池島小学校

近藤 千尋

### 自問清掃を取り組み始めて

現在、本校では自問清掃を取り入れ初めて三年目で、学校全体で取り組み始めました。今年度は、自問清掃を進めていく清掃主任を任されています。しかし、そんな私が自問清掃に出会ってから、まだほんの2年足らずです。最初はなんとなく違和感もあり、興味もなく、そんなのがあるんだって思うだけでした。そんな私を知りたいと振り向かせたのは、どんどん成長していく子ども達の姿です。そこからは、本を読み、見よう見まねでとにかくやってみました。しかし、うまくいくはずもなく、教師の思いだけで、子ども達の成長は見られませんでした。そこで初めて、同僚に教えてもらい、自問教育の会に参加させていただくことになりました。

私にとって、自問清掃との出会いは、子ども達よりも、まず、自分自身をかえる、教師生活のターニングポイントのようなものでもありました。もっと子どもたちを輝かせたい、もっとあったかい学級に！そんな思いが今まで以上に強くなり、子ども達との接し方が変わりました。そうすると、教師と子どもとの人間関係も少しずつ良くなっていったように感じます。

自ら取り組む人とそうでない人との温度差も

あり、1年目の今は進めていくことに難しさを感じます。しかし、輝く子ども達の姿にもっと出会いたい！自ら輝くことのできる子ども達に！そんな思いで、続けて努力していきたいと思っています。

## 山口県玖珂郡和木町立和木中学校

大廣 絃巳

### 3年目に入った心磨き清掃

『何事も一生懸命やっていたら必ず協力者が現れる』とよく言われますが、まさにその通りだということを今、感じています。昨年度まで、生徒指導主任という立場で生徒が落ち着いた学校生活を送ることができるようという強い思いで自問清掃を「心磨き清掃」という名称で半ば強引に取り入れ（導入時に強い反対もありませんでしたが、大きな賛成もありませんでした）、教職員の共通理解にやや頭を痛めながら実践していました。

その中で、新生徒会が活動を開始した1月から新しい担当とそれまで以上に心磨き清掃のことを話す時間が増え、その結果今まで以上に生徒会でバックアップしていき、和木中学校を良くしていきたいということになりました。3月まで各委員会を下準備をして、4月から本格的により多く生徒会が積極的に心磨き清掃に関わるようになりました。

また、4月からは自分が研修主任という立場に変わり、別の角度から心磨き清掃に関わるようにもなりました。生徒会執行部及び各専門委員長がまず最初の全校集会で、初めて生徒会重点施策説明会を開催しました。生徒会重点施策説明会とは、生徒評議会（執行部と各専門委員長で構成されたメンバーによる会）が、生徒自らの手で、和木中学校をよりよい学校にしていくために目標を定め、その目標実現のために全生徒に協力してほしい内容を説明する会のことです。

目標 「けじめと活気のある学校」 学校生活に「けじめ」をもち、各学校行事の取組には



活気あふれる学校にしていきたい、という願いが込められています。

そのために、最重点施策（具体的目標）を定めました。

最重点施策 「心磨き清掃の充実」 生徒評議会のメンバーが、「和木中の課題は何か」に対して自分たちの考えを結集し、一点に絞り込みました。そして、この課題解決に生徒全員で総力を挙げて取り組むために、生徒全員の意志の統一を図ろうとする意図で、この重点施策説明会を開催し、「一点突破から全面展開へ」という理論を用いた取組の手法で目標を6月の生徒総会までに達成しようとしてきました。

さらに生徒総会で、『心磨き清掃で心が磨かれるか』をテーマにした全校生徒による協議会をディベート方式で行いました。

結果 磨かれる（賛成派） → 正解

磨かれない（反対派） → 正解

＊その人の「心」の問題である！

『心を磨けば人生が輝く』という結論を導き出し、総会を終えました。さらにその後の生徒評議会で、現状維持は衰退の始まりとの考えから、それまで、活動場所に行って黙想をして待ち、活動を始めるという形の心磨き清掃（始めた時は教室からの移動であったが、移動中の私語が減らないため活動場所で待つ形になっていた）を教室から無言で移動し、活動する形に生徒評議会の提案で変更して行うようになりました。

変更には慎重な意見もありましたが、行ってみると今のところ続けられそうな状態です。最終的には、活動が終了してから教室に移動するまでを「心磨き清掃」と考え静かなまま教室に戻るようにしたいと考えています。もちろん、無言清掃とは違うので、活動もみんなで充実させしていき、すべての生徒、教職員の心が磨かれ、人生が輝くようになることを信じて実践を継続していこうと強く思い1学期を終えました。

## 北海道恵庭市立恵み野旭小学校

近藤 真司

### 自問清掃との出逢い

平田先生の自問清掃に出逢ったのは、5年前の冬休み。その当時、持ち上がりの6年生を担任させてもらっていた。その当時、子どもたちと自分の距離を上手くとることが出来ず、子どもからの反発や学級内でトラブルが頻繁にあり、学級経営に悩んでいる時期であった。当然、掃除も雑然とし、掃除の時間は、巡回・指示・命令・注意をし、どうしたらよいかわからない状態であった・・・いや、「掃除とはこのようなものである。」と思って指導していた。

そして、2学期の最後に子どもから「掃除の時間、〇〇さんが全然掃除をしないし、嫌なものばかりを私に押し付けてくるのでどうかしてください。」と訴えられた。

その冬休みに出会ったのが、平田先生だった。平田先生の学級経営や自問清掃の考え方に逢い、感動した。しかし、時はすでに、3学期。ここから新たな取り組みを始める勇気がなかった。しかし、同僚の先生がすでに自問清掃を取り入れてやっていたので、そのやり方などを学ばせてもらい、『やらないで変わらないより、やって失敗した方が価値がある。』という言葉ももらい、思い切って6年生の3学期から自問清掃を導入した。

もちろんすぐに変わることはなかったが、先ほど訴えてきた子どもは、卒業の時、「あの時に掃除の仕方を真剣に考えて、変えてくれてありがとうございます。」と言われたことが嬉しかった。

その後も自問清掃を引き続き、どの学年でも実施しているが、ここに来てようやく自問清掃と学級経営のリンクを意識するようになった。自問清掃から始まる自問教育を意識してこれからの自分の教育活動をしていきたい。

子どもが輝く「魔法の掃除」（三五館）の『指導者は始動者』という言葉に留めて・・・。

## 長野県小谷村立小谷中学校

依田 みづき

### 初めての自問活動

本校の自問活動では、「ねばり玉・親切玉・発見玉」の3つを意識し、無言で取り組むこと、やりきることが目的ではなく15分過ぎたらそこで終わること、清掃へ気持ちが向かない時は「なぜ気が向かないか、仲間を見て何を感じるか」と座って考えることになっている。今年、私は一学年の生徒たちと自問活動を行うことになり、導入としてまず先輩の自問活動を見学することになった。黙想を促す放送が流れると、校内が一斉に静かになり、その後15分間、作業の音しか聞こえないのである。環境整美委員は袋を持って各清掃分担のごみを回収し、他の生徒は各自の分担場所を黙々と清掃するその光景に、正直とても驚いた。

その後、私は教室で生徒たちと自問活動を行うことにした。22人学級なので各分担場所の人数は少なく、教室担当の生徒は3人。当初、言葉を交わさずに行う自問活動は、机運びや雑巾がけのペースが合わず時間内に終わらなかった。やりきる必要はないが、生徒たちも自分も何かスッキリしなかった。しかし、だんだんと生徒たちの取り組みが変わってきた。雑巾がけの幅が大きくなり、机を運ぶペースも速くなってきた。しかも、生徒たちは慣れてくると机や台を拭く余裕もできてきた。

生徒たちと自問活動をして驚いたことは、手際がよくなる過程で効率を上げるための話し合いが全くなかったことである。言葉は交わさない分、周囲に気を配って相手に何が必要なのかを考えた結果なのだと思う。また、自問のあとの生徒たちは達成感を得るようであった。それは分担場所を無言でやり遂げようとする責任感からくるものなのかもしれない。自問の15分は、周囲への気配りや自信を育てるための、生徒の心の成長に欠かせない時間なのだと感じた。自問活動について正直まだわからないことも多いが、本校の伝統として続いているこの活動をこ

れからも生徒たちと大切にしていきたいと思う。

## 長野県松本市立島内小学校

竹内 進悟

### 清掃主任になって

今年になって、若年ではあるが清掃主任を任されることになった。清掃は、自校の3つの重点活動のうちの1つである。しかし、これといった取り組みはこれまでされず、各担任の指導に任されているだけだった。昨年度の3月に校長先生が、4月からは昼休みを5分削り、掃除の前に子どもは自分の教室に集まることにしよう、ということだけを決めて退職された。職員は賛否両論。昼休みは減らさない方がいい、しかし今の日課のままでは教室が遠いので遅くなる、本当にやる意味はあるのか、清掃の件は一体どうなったんだと誰もが心配していた。混乱が続いたまま新学期が始まり、清掃主任となったが、何から始めればよいのかわからなかった。しかし、自問清掃で培った考えが生きてくるのではないかという淡い期待のようなものもあった。

以前から自分の学級では自問清掃を続けていた。低学年でも掃除の後に感想を書かせるなどの取り組みを続け、学級通信で保護者には伝えていた。そのお便りが校長先生の目に止まったのだろう。それが自問清掃だということはご存じであった。校長先生は、自問清掃に期待をしていたのかもしれない。自問清掃に取り組んでいた私に期待をしてくれたのかもしれない。自問清掃に出会って私は変わった。自問清掃のすばらしさは自分自身が身をもって感じている。しかし、いきなり自問清掃を全校に広げることなどできない。では一体自分にできることは何なのか。何を期待されたのだろう。悩んだ末、自問清掃は自分のクラスだけでとどめ、しかし、これまで自問清掃から学んだことを大切にしながら、先生方と話し合ってみようと思った。

人当たりのいい優しい先生が多い学校ではあるが、掃除では（生徒指導や生活指導でも）め

っきり指示、命令、注意（時に強すぎる指導）が飛び交うのが日常だ。それでいて、子どもだけを、しかも掃除の場面に限って取り組みを良くしようというのだから、引き出しの少ない私は、どうすればよいか困ってしまった。とりあえずは、校長先生の置き土産についての話に重きが置かれた。集合システムに対する反対意見は多かったのだが、取り組むことは決定していたので、いかに先生たち自身がそのことに価値を見出し、子どもにどう下ろすかが鍵となると感じた。そうすると始めの仕事は決まった。それは職員の意思統一。具体的には、教師がどのように子どもと向き合い、このシステムについて話し、どのように子どもの掃除に向かう気持ちに刺激するかということだ。システムそのものは、メリットはあるだろうが素晴らしくいいというわけではない。「今日から掃除の前に教室に集まります。」などと勝手に教師が決めて、子どもはよくなるなら苦労はない。ただ、これをきっかけに、掃除への向き合い方をいい方へ変えられるチャンスにできるかもしれない。それは担任の技術であり、心であると思う。それは自問清掃でも同じだと感じた。自問清掃に価値を見出し、自分自身が咀嚼し、何より子どもの気持ちに寄り添ってやることができこそ、

やっと子どもたちと一緒に成長できてきたように思う。それができないでいたときの自問清掃は空回りしてしまうだけだった。何より子どもを大事にできていなかったと今になって思う。今回の集合システムも、先生方が納得し（別に言い方をすれば腹をくくり）、決まったことを押しつけるのではなく、子どもの立場や考えを汲みながら話をし、おろし、決めていくことができたなら、そのクラスの子たちは変わっていくのだろうと思う。そして先生も。しかし、それすらも学校全体で統一することは難しかった。掃除に対する価値観が異なっていたり、価値が見出せない（やる意味がない）と思っていたりする先生は、粗探しになってしまう。どんなことにもメリットがあるはずなのに、デメリットしか探そうとしないので、うまくいかない。しかしそれは自分にも同じことが言える。だから、そういう見方や考え方もある、とデメリットを受け止める余裕を自分は持っていたと思う。

自分のクラスも含め、全校の子どもたちの清掃への取り組みが大きく変わったとはまだ言えない。しかし、徐々に変化は見えてきている。子どもたちを信じて、教師自身が変わることができたら、そこには大きな可能性が秘められているかもしれない。

## 広がる 自問清掃のネットワーク 平田治（自問教育の会理事）

「自問清掃」は確実に広まりつつあります。その様子的一端をお伝えします。

所謂学力問題が前面に押し出され、同時に「いじめ」などの問題が頻発するようになった今、今こそ自問教育が必要だと考える教師が増えてきているのでしょうか。あるいは、数値化できる学力向上が求められる一方で、そういう表層の背後にある真の学力に目を向けている教師が少なからずいることの証明だとも考えられるでしょう。

大阪で発足した『自問清掃教育研究会』は初回30名近くの参加者を得て充実し、8月下旬には第2回、秋には第3回が予定されています。8月25日第2回には、平田が講話「学校掃除是非論争史を巡って一日本の教師の掃除観一」を予定。大阪地区の他、新潟・愛媛・石川からの参加も予定されています。

九州博多で10月14日に開催予定の『自問清掃研究会・博多』は、会場として中央市民センター視聴覚室をすでに確保しました。7月下旬に発起人等(平田・陣内・高橋・井上)が博多で打ち合わせ

会を開きました。チラシを作成し近日中に全国にお知らせする予定です。大分、福岡、佐賀などからの30名程度の参加者を想定しています。熊本・宮崎・鹿児島での実践校へも、声をかけるつもりです。

石川県での実践も九州同様学校単位の場合が多いのですが、白山市では野々市中学校を初めとして（現在確認できているだけでも）7つの小中学校で取り組まれています。これらの小中学校での実践者を中心にすでに『自問清掃ネットワークいしかわ』が設立され、8月1日金沢大学附属中学校で第1回自問清掃研究会が開催されました。参加者は、40名でした。大阪の岡本さんから学級での取り組みが詳しく報告され、取り組み始めたばかりの先生方にも具体的なヒントがたくさん提供されました。平田がワークショップを兼ねた講話「西田哲学から見た「自問清掃」(1)―5段階は5つの段階か―」を行いました。西田幾多郎の出身地はこの石川県であり、西田哲学には「自問清掃」を読み解く鍵が隠されていると考えています。



同日の午前中は野々市中学校において土井進(信州大学教授)先生のご講演もあったそうです。同校では、来る11月1日自問教育自主公開研究会を開催予定であり、多くの方々にご参加いただきたいと思います。

北海道では、山田洋一さんを中心とする自主研修企画サークル「北の教育フェスティバル」において5年ほど前から「自問清掃」が採り上げられています。山田さんはその著書『教師道の極意』の中でも「自問清掃」との出会いについて相当の頁を割いて紹介していますし、自問教育の会会報においても近藤・高橋・宇野さん等が実践の様子を伝えてくれました。8月初旬の「理論と実践のハイブリッド・平田ゼミ」でも、「自問清掃」を採り上げます。ここでは、学級経営全体の中で掃除をどう意味づけていくかを考え合いたいと思います。

東京では、4月に三浦さん渡辺さんと体育同志会のメンバーによる研修会が開かれ、平田が「自問清掃」の概略を紹介する機会を得ました。今後学習会が定期的に企画されることが期待されます。

## 《編集後記》

7月12日(金)長野県松本市立会田中学校で行われた道徳(自問教育)授業研究会に参加しました。本年度11月29日(金)30日(土)の2日間開催される「全国自問教育の会」に向けて、全校での実践が動き出している様子を参観することができました。自問清掃が始まる前、2階オープンスペースに集まる全校生徒を前に語り始める丸山先生の姿に惹きつけられました。「竹内(自問教育の創始者)は、生徒の可能性を信じあくまで待ち続けることにし、『教育は子弟の信頼によってなりたつ』と主張した。」と「学校掃除と教師成長 自問清掃の可能性(平田治著)」の中で紹介されていますが、目の前に具現された姿がそこにあると感じました。生徒と教師の間に本物の呼応関係があるからこそ、深いところで生徒が自分を見つめ、心を開き、友の中で学んでいくのだらうと思います。会田中の指導案では、「10年後、20年後に開花することを願って、やり続けます。3年間の取り組みでは、目の前で明らかかな成果を感じ取れないことの方が多いといえるのです。ただ、3年間で身につけた自己のあり方を見つめ自問自答する姿勢が後に花開くと信じている。」と結ばれています。そんな姿を願って実践されている先生方が全国各地にいらっしゃることに心強さを感じています。11月に松本で会いましょう。

(文責:片岡)